

旭川医大 病院ニュース



(編集) 旭川医科大学医学部附属病院
広報誌編集委員会委員長
千葉 茂



教授就任にあたって

医療情報部教授 廣川 博之

本年6月より、附属病院医療情報部を担当させていただくこととなりました。附属病院ではこれまで学内措置である「医療情報室」が、オーダーリングシステムを中心とした医療情報システムの開発・運用・管理を行ってまいりました。室長には医療情報室の前身である「医療情報システム企画室」の期間を含め、4名の各講座の教授が併任され、システム開発にご尽力されました。組織の整備強化を図るため、昨年4月に医療情報部の新設が認められましたので、専任教授としては私が初代となります。責任の重さに身の引き締まる思いであります。

私は、昭和55年に旭川医科大学を二期生として、卒業いたしました。卒後は道内での診療科別医師数の非常に少なかった眼科医になる決心をし、本学眼科学教室に入局いたしました。その後、現在まで米国に留学していた2年間と、釧路市の関連病院眼科にいた1年間以外は、本学で過ごさせていただいております。

さて、ここで一眼科医の私と新しい学問である医療情報学の接点について少し述べたいと思います。医療情報学の分野では第一人者の国立大蔵病院院長開原成允先生は、医療情報学を「診療・医学研究・医学教育・医療行政等、医学のすべての分野で扱われるデータ・情報・知識をその医学領域の目的に最も効果的に利用する方法を研究する科学」と定義しています。したがって、医療情報学で扱われる領域は、医学の他、数学・統計学、工学、言語学、政治・経済など多岐に渡ります。臨床医学だけに限りましても、①病院・診療所の

情報化、システム化、②遠隔医療、在宅医療、医療機関連携などの地域医療に関する情報化、システム化、③医学・医療情報提供サービス、④診療、看護支援などがあげられます。これらのうち、私はこれまで本学眼科学講座で吉田教授と共に、関連病院眼科医師の教育を主眼とし、遠隔医療ネットワーク構築の開発に携わってまいりました。これにより、いくつかの関連病院と間で、遠隔診療、遠隔手術支援を行うことができるようになりました。さらにハーバード大学や中華人民共和国の南京中医薬大学とも結び、眼科疾患診断、治療法に関するディスカッションやライブサージャリーを伝送し、最新の医学・治療技術の習得、研究を双方向で行うことも可能となっています。先頃、附属病院に遠隔医療センターが完成しましたが、これまでの遠隔医療の経緯を生かし、同センターに設置されます種々の画像受信装置を用いた、全診療科の遠隔医療の推進・遠隔教育に微力を尽くしたいと考えております。

また、現在附属病院でオーダーリングシステムが活用されていて、医療に不可欠なものとなりつつあります。今後も医療の高度化、病院業務の効率化、患者サービスのより一層の向上を図るため、情報量のさらなる増加が予想され、それらに伴う、医療情報公開を含めた、情報の有効利用に関する様々な要請に対処することが必要になります。したがって、今後医療情報教育や電子カルテ化をも視野におきつつ、新システムの研究・開発・運用に取り組んでまいりたい所存であります。皆様のご指導、ご支援をよろしくお願い申し上げます。

Fresh
Voice

フレッシュボイス

皮膚科 飛澤慎一

私が、皮膚科学講座に入局し研修医として働き始めて、はやくも約5ヶ月余りの月日が過ぎさりました。この間、自分は何を学んできただろうかと、ふと考えてみると、あまり成長していない自分に気付いたりもします。それどころか、学生時代より医学知識量が低下しているのに気付き、情けなくなったりもしています。もちろん、病棟のコンピューター入力の方法であるとかいった作業上の技術は、身に付いてきてはいるのですが、肝心の医師としての知識、技術はまだまだといったところです。状態が悪くなった患者さんの容態が悪くなった時に、医師であるにもかかわらず、

Dr. callで指示を仰ぐというのが現実です。臨床以外の面でも、抄読会・勉強会においても、肝心なことが実は分かっていなかったという現実直面して冷汗が出たりもしています。勉強に関しては、いくらやっても先が見えてこない、まるで学生時代の試験前日の状態が続いているかのようであり、医学の奥深さを改めて認識しています。学生であれば、知識不足、誤った知識であったとしても、追試を受けたり、留年して再度試験を受けるといった再起をかけたチャンスが残されていましたが、医師の場合、誤った知識により患者さんの予後を著しく悪化させ不可逆的なものにしてしまいかねないということもあり、勉強の重要性を感じざるを得ません。そうは感じてはいても、実際には覚えたつもりでも、臨床の現場で十分応用できておらず、知識を上手に使う判断力が足りないと思われる時もあります。正しい知識・技術を身に付け患者さんの予後改善させるような医療を行える医師となるよう努力していくつもりです。

Fresh
Voice

眼科3兄弟

眼科 横田陽匡

上から長男 小澤隆幸、次男 横田陽匡、長女 西川典子の3人で構成されています。

働き始めてから約4ヶ月程が過ぎました。3人はそれぞれの個性を生かして働いてはいるつもりですが、まだまだ関係者の方々に御迷惑をおかけしている月日が続いております。

長男であるDr小澤は若干朝には弱い面がありますが、常に冷静沈着で物の考え方が非常にスマートであります。続いて次男であるDr横田は、元気だけがとりえではありますが、最近やや疲れが目立ってきているようです。最後に長女であるDr西川は、一見するとおとなしめの女性ですが、芯の強い頼もしい妹であります。以上3人について簡単にコメントさせて頂きましたが、我々眼科三兄弟に共通する気持ちは、少しでも多くの患者さんの病状が改善して、その喜ぶ顔が見たいというものです。実際に働いてみて痛感することがあります。それは、病気を治すということの難しさです。例え同じ病名でも症例によって治療が微妙に

異なってきますし、眼科に入院してくる患者さんの多くは、多かれ少なかれ基礎疾患を持っております。病棟で患者さんの命を預かる以上、我々眼科三兄弟は常に患者さんの全身状態に気を配りながら、眼の治療がスムーズに行なわれるように頑張ってきたつもりです。この場をお借りして、御高配を賜った他科の諸先生方、並びに関係者の方々に深く感謝申し上げます。

これからも、眼科病棟並びに外来の運営が少しでもスムーズにいくよう、一人一人の力は微々たるものではありますが、3人で力を合わせて頑張っていきたいと思っております。

これからも皆様の厚い御支援、御指導の程よろしくお願い申し上げます。





Fresh Voice

憧れの職業

放射線部

杉 森 博 行

「大きくなったら何になりたい？」……この質問は誰も一生の中で一度は聞かれているはずであると思う。たぶん20年くらい前の自分は「ドラえもん！」といったように他愛のないことをきっと口にしていただろう。

覚えている限り、小さい頃には特にこれといって「〇〇になりたい」という事はなかったような気がする、親もそれについては特に口出しはなかった。

きっかけはとても単純だった。高校の頃、何気に見ていたTVで輪切りになった頭の写真を見て興味を持ったということだ。今思うと笑ってしまうが、それがCTによる頭の1スライスだったということは当時知る

はずもなかった訳だが……。他人に言わせれば単なる好奇心かもしれないが、自分にとってはそれが今につながる大きな出来事だった。そのときそれを目にしていなかったら、今いったい自分は……などと時々考えてしまうくらいに。

CTへの興味から診療放射線技師への興味につながるのにもそんなに時間を要しなかった。なぜなら、この職業が多分野に関わりを持っているということを知ったからだ。胸部写真などの一般撮影をはじめCT、MRI、放射線治療、核医学のように色々な分野があること、かつどれも探求すればきりが無いほどに奥が深いものであるということがどれも自分の興味にがっちりかみ合った。そのころから「放射線技師になりたい」というひとつの夢でもあり目標ができた。

放射線技師になった今、教科書上や実習上で得られなかった新しい発見や技術に出会うこともあり、勉強することもたくさんありますが、たくさん色々な経験を積んだ頃には「技師」として、また「Co-Medical」として探求しつづける医療従事者になりたいと、新しい目標を持って頑張っていきたいと思います。



Fresh Voice

看護婦として働き感じること

6階東NS

柳 橋 亜 貴 子

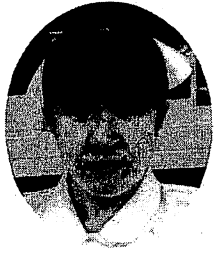
旭川医科大学付属病院で看護婦として働くようになってから、早くも6カ月目を迎えています。まだまだ未熟な点が多く、先輩方に助けて頂きながら、あっと言う間に過ぎて行く毎日を過ごしています。

初めのころは、実習で看護婦を見ていたのですが、仕事の多さ、大変さに驚き、病棟を駆け回る毎日でした。現在は、少しずつではありますが、考える時間ができているところです。

日々患者さんと接する中で、見えないこと、話せないことなどの機能の低下、喪失に伴う患者さんの不安は大きく、日常生活全てにおいて変化をもたらす、患者さんの訴えも多くなります。思いやりを持って話していても、逆の意味に取られたり、その時の患者さんの心理状態によると思うのですが、ほんの少しのニュ

アンスで、伝わり方が全く違ってくることに戸惑うこともありました。言葉を使わないコミュニケーションも難しいのですが、言葉を使うのも難しいと改めて感じています。看護婦はそういった患者さんに最も近く、ちょっとしたことで患者さんに大きな変化をもたらしたり、奥が深い、やり甲斐がある仕事と感じています。その分責任も大きく、質が問われるものだと思いますが、何も分かってない今だからこそ、1人1人の患者さんとの関わりを大切に、多くのことを学んで行ければと思います。しかし、自信のなさから患者さんから離れたくなる日もあり、覚えること、学ぶことが多く、何も分かっていない自分に何ができるのか、看護婦とは何をしたらよいのか、知識、技術、経験不足と、仕事の責任の重さの間で挟まれ、落ち込む日もありました。そういった時、友人や同期の同じような経験や、先輩方の言葉に励まされて、何とか乗り越える日々を送っています。

一人前の看護婦になるにはどのくらいかかるか想像もつかず、回りのスタッフの方々には御迷惑をかける日がこれからもあるかと思いますが、専門職としての看護とは何か考えつつ、少しずつ学びながら成長して行ければと思います。



Fresh Voice

看護婦4カ月の私について

10階西NS

竹田 弥穂

私が精神・神経科病棟に勤務してから4カ月が経ちました。入職した当初は、患者さんから「看護婦さん。」と呼ばれることにとても違和感がありました。ある時、患者さんから質問され、私は「分からないので看護婦さんに聞いてみますね。」と答えました。すると「あんたも看護婦じゃないの。」と患者さんに笑われてしまい、その時自分が学生の時気持ちで答えていたことに気づき、恥ずかしい思いをしたことがありました。そして患者さんから質問されても何も分からないため、呼び止められる度に「何だろう？。私に聞かないでほしいな。」といつも緊張していました。しかし、4カ月经ち、ようやく患者さんと緊張せずに話せるようになり、少し仕事にも慣れてきました。

それでも他の先輩看護婦に比べると、まだまだ何もできず、毎日迷惑をかけてしまっています。失敗したり、注意されるたびに落ち込むことも多く、なかなか立ち直れないこともあります。そのようなときには決まって患者さんに「どうしたの？。険しい顔しているから何かあったのかと思った。」と言われます。このような患者さんの何気ない言葉が、「いつまでも落ち込んでいられない。元気ださないと…。」と私をいつも励ましてくれます。私にとって患者さんの存在はとても大きく、患者さんが私を支えてくれたからこそ、きっとここまで働くことができたのではないかと思います。

最近は少し仕事に慣れてきたとはいえ、他のスタッフが私ができない仕事をいつもカバーしていただいている部分がとても大きいと思います。まだまだ覚えなければならないことが多く、また、これからは自分で判断していかなければならないこともあります。すぐには出来ませんが、先輩方の助けを借りながら、1日も早く仕事ができるようになるよう努力していきたいと思っています。

【薬剤部】

新薬紹介 (34)

マレイン酸フルボキサミン(デプロメール[®]錠)

人口の少子、高齢化や高度の情報化および価値観の多様化により急激に変化する社会情勢を反映して、あらゆる世代に「不安・抑うつ」が増加しています。うつ病の生涯有病率は全人口の5～10%ともいわれています。うつ病治療では、これまで三環系・四環系抗うつ薬が主に使用されてきましたが、選択的セロトニン再取り込み阻害薬(SSRI)として開発されたのがマレイン酸フルボキサミン(デプロメール[®]錠)です。

本剤の作用機序は、セロトニン神経終末のセロトニントランスポーターに結合してセロトニンの再取り込みを阻害し、シナプス間隙でのセロトニン濃度を増加させ、セロトニン神経伝達を増強することによります。欧米では、すでに複数のSSRIが用いられており、米国においては中等症以上のうつ病でSSRIが第一選択薬となっています。従来の抗うつ薬は、セロトニンとノルエピネフリンの両者の再取り込み阻害作用を有する非選択性ですが、本剤は、セロトニンに対して180倍の選択性を有しています。

臨床効果としては「うつ病及びうつ状態」に伴う抑うつ気分、睡眠障害、意欲・気力の減退、不安、各種

身体症状対して効果があるとされ、61.7%の改善率が得られています。また、本剤の特徴として、本邦ではじめて「強迫性障害」への使用が承認されています。

安全性評価では、43%に副作用が認められています。頻度の高いものは嘔気・悪心、口渇、便秘、眠気などです。消化器症状は投与初期に多く発現し、通常継続投与により自然軽快します。錐体外路症状・セロトニン症候群・性機能障害等も注意すべき副作用としてあげられます。うつ病治療では自殺企図による抗うつ薬の大量服薬が問題となります。しかし、従来の抗うつ薬と異なり、心血管系への作用が少なく、致命的とはならないとされており、大量服用に際しての安全性は高いと指摘されています。また、本剤は薬物代謝酵素CYP3A4を阻害するから、テルフェナジン・アステミゾール・シサプリドとは併用禁忌となっています。MAO阻害剤とも相互に薬理作用増強の可能性から併用禁忌です。

SSRIは今後うつ病治療の中心的薬剤になると思われます。一方で、米国では暗い性格を治す「性格改造剤」としてのSSRIの乱用が問題になっています。最近日本でもマスメディアに取り上げられ話題となりました。しかし、そのような効果は少なくとも本剤では確認されておらず、患者への正確な啓蒙および適切な使用が望まれます。

(薬品情報室 栗屋 敏雄)

●●● 中央採血室紹介 ●●●

中央採血室は昨年7月8日、病棟2階の検査部に隣接して、周辺設備が不十分ではありましたが、暫定的な運用を始めました。そして本年1月に検査部総合臨床検査システムの機器導入と同時に、中央採血室に必要とされる設備が整備され、4月1日に本格的稼働を開始しました。

すでにご存じとは思いますが、中央採血室は外来患者さんを対象とするもので、本院では採血数の多い、午前8時40分から午後2時までの開室時間として運用しております。

表は本年1月から6月までの1日平均の採血患者数および時間帯別による採血患者数を示しています。特筆すべきは、本格稼働した4月以降1日の平均採血患者数が増加しており、その主たる原因は早朝の時間帯が増加していることによります。このことは中央採血室の開設目的の最大のメリットである、診療前検査が浸透してきたものと思われま。

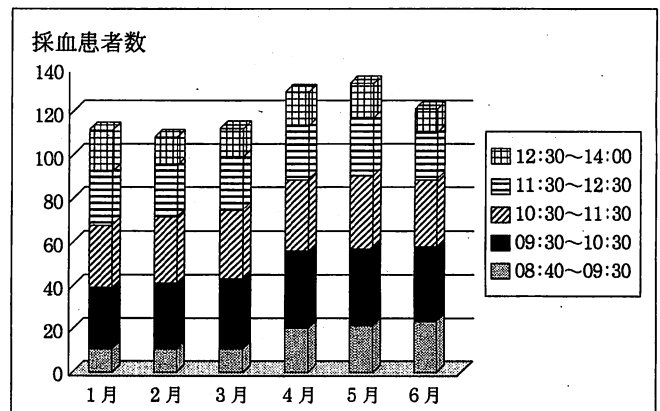
採血要員は中央採血室ワーキンググループの決定事

項に従い、当初から医師1名（診療全科輪番制で11時～12時）看護婦2名、臨床検査技師1名で担当しています。

尚、運営は中央採血室連絡協議会（第一内科、第二内科、第三内科、小児科、第一外科、産婦人科の各外来医長、外来婦長、医療情報部担当委員、検査部副技師長、検査部長で構成）を設置し、現在第二内科外来医長を中央採血室連絡協議会代表として運営しております。

（第二内科 横山和典）

一日平均採血患者数および時間帯別採血数



輸血部発 ⑳

輸血のリスクマネジメント 1

最近、型違いの血液製剤を輸血するという輸血事故?の新聞報道がしばしば見られますがご存じでしょうか。

一番新しいものは8月13日付けの報道ですが、熊本大学附属病院でB型の術後患者（胃の手術）に8月9日午後10時から午前0時にかけてO型の血液製剤1パック（160ml）を輸血したというものです。病院長はただちに記者会見を行い、輸血を実行した研修医（27）、看護婦（40）、製剤を受け渡した当直技師（50）の3名は謹慎処分となっています。

このミス発端は、研修医が患者の血液型を間違えて認識していた事に始まります。つまり9日深夜、術後患者に血液製剤（冷凍庫から出したとありますから新鮮凍結血漿でしょう）を投与しなければならないと考えた研修医は、患者の血液型をO型と誤って記憶していたようで、自ら輸血部へ行き、冷凍庫から製剤3パックを取り出し、それを手渡された看護婦がO型の

新鮮凍結血漿160mlをB型の患者に輸血したもので、2つ目のパックを繋ごうとした別の看護婦が、腕バンドの患者血液型と違うことに気付いたのです。

この事件をマスコミが取り上げたのは血液型の間違いですが、果たしてそうでしょうか。血液型の間違いがあったのは事実ですが、専門的にはB型の患者にO型の血漿を160ml程入れたところで、溶血副作用が起こりうる確率はほとんどありません。血小板輸血の時のように、同型製剤がなく、型違い輸血を認識して行っていれば特に非難されることはないでしょう。しかし問題は2つあるのです。

1つは思いこみで始まった間違いを、2人の別の人がチェックできなかったこと（使えるはずのコンピュータを使わなかったこと）。もう一つは、深夜にわざわざ輸血部まで製剤を取りに行って新鮮凍結血漿を輸血する必要があったのかという点です。この後者は輸血適応の問題で、適応を決定した指導医は処分の対象にはなっていません。

この2点はいずれも、いつもやっている、無意識の中での過ちですが、対岸の火事とせず、あらためて輸血には注意されるようお願いいたします。

（副部長 山本 哲）

平成11年度 患者数等統計

区 分	外 来 患 者 数			一 日 平 均 外 来 患 者 数	院 外 処 方 箋 発 行 率	紹 介 率	入 院 患 者 延 数	一 日 平 均 入 院 患 者 数	稼 働 率	前 年 度 稼 働 率	平 均 在 院 日 数 (一 般 病 棟)
	初 診	再 診	延 患 者 数								
4 月	人 1,101	人 19,041	人 20,142	人 959.1	% 48.75	% 42.20	人 15,960	人 532.0	% 88.67	% 89.26	日 31.47
5 月	人 1,004	人 16,120	人 17,124	人 951.3	% 49.06	% 42.03	人 16,478	人 531.6	% 88.59	% 87.66	日 37.08
6 月	人 1,109	人 18,374	人 19,483	人 885.6	% 49.75	% 42.83	人 16,271	人 542.4	% 90.39	% 88.82	日 31.83
累 計	人 3,214	人 53,535	人 56,749	人 930.3	% 49.18	% 42.35	人 48,709	人 535.3	% 89.21	% 88.47	日 33.31
新設医科大学平均	人 3,977	人 49,904	人 53,881	人 883.3	% 43.51	% 41.77	人 48,106	人 528.6	% 88.12	% 89.42	日 30.95

(医事課)

遠隔医療センター 完成記念行事を挙行

旭川医科大学医学部附属病院遠隔医療センターの完成記念行事が7月15日(木)、同センター研修室で約100名の関係者を迎え盛大に行われた。

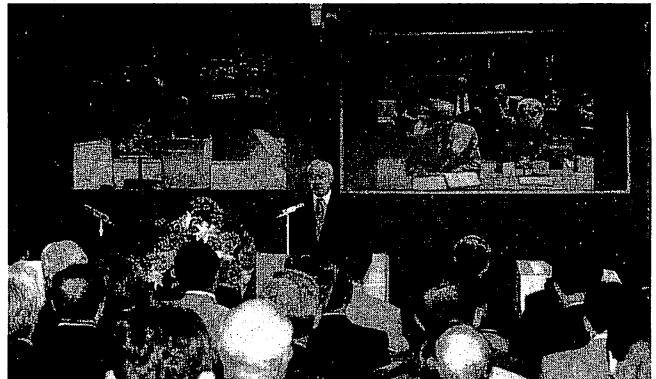
記念式典では、久保学長が「遠隔医療の技術を駆使して、質の高い医療を均等に提供し、地域医療を一層充実させたい」と式辞を述べ、柳澤文部省大臣官房文教施設部札幌工事事務所長(池田文部省大臣官房文教施設部札幌工事事務所長補佐代読)、小山郵政省北海道電気通信監理局長(成田郵政省北海道電気通信監理局電気通信部長代読)、堀北海道知事(妹尾北海道保健福祉部技監代読)、森札幌医科大学医学部長、井上北海道旭川保健所長及びハーバード大学医学部スター国際遠隔医療センターから回線によるリアルタイムで、チャールズ・L・スケペンス博士、J・ウェイン・ストライン博士の来賓祝辞、スクリーン上でのテープカットを日・米で行った後、祝電が披露された。

式典終了後、会場を「旭川グランドホテル」に移して祝賀会が行われ、牧野病院長の挨拶の後、森旭川市医師会長並びに千葉札幌医科大学医学部附属病院長の

祝辞があり、黒田元学長の乾杯の音頭で祝宴が始まり、続いて清水前学長のスピーチ、吉田遠隔医療センター長の乾杯による終宴まで終始和やかなうちに遠隔医療センター完成記念行事を終えた。

祝賀会終了後、遠隔医療センターを中心とする地域と緊密な連携、当センターの活用方策等の意見交換の懇談を郵政省、北海道、近隣の町、旭川市医師会及び医療機関の代表者と久保学長を始めとする本院関係者で行い、今後、「旭川医科大学附属病院地域医療懇話会」を設置し、地域との連携を図ることとした。

(遠隔医療センター広報担当 廣川博之)



式辞を述べる久保学長(右側スクリーン上はチャールズ・L・スケペンス博士(右)とJ・ウェイン・ストライン博士)

●●● 編集委員から ●●●

縦のものを横にする新世紀

千葉編集委員長、牧野病院長の御英断により本号を期して病院ニュースが横書きになりました。70号を数える本誌の歴史の中でもこれは画期的なことです。英字や単位の標記に違和感がなくなり、ワープロ原稿の編集も容易になりました。唯一の問題であった題字の横書き化は、後に『秘話』として語り継がれるべき『Chiba Magic』によって解決されました。横になってみると今までなぜ縦であったのかが不思議でさえあ

ります。思えば新聞はなぜ縦書きなのでしょう。

『これで普通』『通常はこう』と言うときの『普通』や『通常』にどれほどの合理性や正当性があるのでしょうか。『普通』や『通常』が、面倒な判断は避け、労力を惜しむ自己弁護の言い訳になってはいけないと思います。『通常』でないことは拒む硬直した発想と姿勢が、サービスを後退させます。

独立行政法人構想ニモマケズ、公務員削減案ニモマケズ、21世紀に生き残るために、今、私達に必要なのは縦のものを横にしてみる発想の転換です。

(編集委員・第一内科 長谷部 直 幸)